

現代美術家

杉本博司

Hiroshi Sugimoto

ニューヨークに拠点を定め、デジタル写真全盛の時代に銀塩のモノクロ写真を撮り続ける杉本博司氏。その作品はミニマルな美にあふれ、日本が生んできた「そぎ落とすことで生まれる洗練」を象徴しているかのようである。社会、経済、文学、芸能、宗教などさまざまな知識を消化して生まれる独自のコンセプトを高度な技術によって表現した作品は、世界中のアートファンや美術館から高く評価されている。自身の作品の背景や現在のアート市場を取り巻くさまざまな課題、外から見た日本の姿など、多彩な視点から語っていただいた。

「表現したいものは自分の中にある」

まずコンセプトありきの写真作品

—— 杉本さんは、世界の海や湖の水平線を撮影された「海景」、ニューヨーク自然史博物館にある古代のジオラマを撮影された「ジオラマ」、マダム・タッソーのろう人形をあたかもフランドル派の肖像画のように写し取られた「ポートレート」など、大判のモノクロ写真シリーズで有名です。写真家の道を選ばれた理由についてお聞かせください。

杉本 僕の家は東京で美容器具の問屋をやっていました。長男ですから跡取りになるかもしれないというので、大学では経済学を専攻したんです。そこで学んだ経済学、経済史や西洋哲学は、それなりに興味深かったですし、現在の僕のモノの見方に影響を及ぼしていることは確かです。しかし母親が大きくモノを見られる人間で、僕があまりにも変な人間なので

(笑)「跡継ぎにするのは問題だから好きな道を行け」と。

—— そんなに変わっていたんですか(笑)？

杉本 子供の頃からモノを作るのが好きで、写真も好きだったのです。父が持っていた「MAM IYAG」というカメラの名機を譲り受け、家に暗室まで作ってもらって、中学の時には相当技術的に高度な撮影をしていました。暗室を作ってくれたのはうちに出入りしていた大工さん。この人から僕は職人のなんたるかを学びました。今でも学芸員と話をするより職人と話をする方がよほど楽しいし、理解し合えます。自分で考えたり作ったりするのが好きだから、ひとりでいるのも全く苦にならない性格でした。

—— 杉本さんの作品はコンセプトがはっきりとあり、それを実現する

る土台として高度な写真技術があると感じます。「ジオラマ」など、実際に古代の生活を撮影してきたような気さえます。

杉本 あれは博物館に大型のカメラを持ち込み、そこにある光だけで撮影したものです。現実のジオラマは模型だとわかるのに、写真という装置を通すとあたかも現実のように見えてきます。最初から「こう見えない」というイメージが自分の中にあるので、人間の眼が何を真実と思うかについて、精通していないといけません。その

ためには長時間露光など、技術的な工夫が必要になってきますから、やはり職人的な技術がある程度完成していないとできませんが。

もっとも最近では、銀塩写真は絶滅種のようなもので、材料自体がなくなりつつあります。僕も特注で作ってもらった感光材をスタジオにある大型冷凍庫に保管しています。これがなくなったらどうしようか、と。もう銀塩写真を撮る写真家は「伝統芸能」の領域に入っているかのようです(笑)。

世界中を巡回する展覧会を開催中

—— そこにあるものを美しく撮る

だけでは、杉本さんのアートにならない……。以前は「写真家」と紹介されていた杉本さんが、最近では「現代美術家」として世界各国で展覧会を開かれている理由がわかったような気がします。今年

ていましたね。

杉本 お声掛けがあったところを回っていますが、今年はドイツ語圏を巡回しています。夏にはベルリンの「ノイエ・ナショナルギャラリー」(国立現代美術館)でも開催しました。この展覧会は、○五年に東京・六本木の森美術館



鎌倉時代の金工技術の粋を集めた火焰宝珠形舍利容器
残欠の中に「海景」シリーズの写真をはめ込んだ作品。
宝珠の向こうに長い時をたゆたってきた海を眺める時、
人ははるか彼方に思念を馳せる。

で開催した「杉本博司 時間の終わり」をもとに、新しい作品を付け加えたものです。

——杉本さんは写真作品のほかに、集めてこられた古美術を組み合わせて新しい表現になさっています。コレクションは縄文・弥生から桃山あたりまでの美術品が中心ですね。

杉本 はい。例えば東大寺二月堂の焼経（火災で焼かれたことにより、美しく変質したことで知られ、古美術好きに高い人気がある）を僕が選んだ古裂で表装したり、鎌倉時代の金工で作られた舍利（仏陀の骨）の容器に自作の「海景」を組み込んだりして、新たな時間意識を表現する作品として展示し

ています。レンブラントの天使が牧童の前に顕現する版画は、茶掛け（茶室に掛ける軸）として表装したところ、「阿弥陀来迎図」と見まごうばかりの軸になりました。

米国はおとし、去年と回りまして、ワシントンのスミソニアン博物館内のハーシュホーン美術館でも開催しました。僕はニューヨークに住んでそちらで税金を払っているのですが、国立の美術館で展覧会ができてようやく少し取り戻せたという気がしています（笑）。展覧会は回顧展とコレクション展の「歴史の歴史」の二つが常に回っている状況です。

——以前「にちぎん」でも取り上げたことのある瀬戸内のアートの島・直島にある「護王神社」は杉本さんの設計です。古代日本の信仰の形を深く理解した「作品」だと感じました。

杉本 これも、表現したいものは自分の中にあるわけです。しかし設計図は描けても自分で作ることができない。非常に難しい仕事ですが、一緒にやってくれる人を探しますが、あくまで自分も職人であ

るという意識です。僕の考えを実現してくれて、職人としての研鑽を積んだ技能のある人。やっては壊し、の繰り返しのような現場なので、無理な注文でも面白がって

今やアートは高利回りの投機商品

——杉本さんは日本でよりもむしろ海外での知名度が高く、コレクターが競って作品を集めていることで知られています。オークションでもどんどん高値が付いているとか。

杉本 以前三〇万円で売っていたものが、今では一千万円ぐらいになっているらしいし、作品によっては億単位にもなるのですが、それはオークションに出品した人や仲介したディーラーがもうかるだけで、僕には関係ないんです。

——一部のコレクターやギャラリ―関係者はよく知っていると思いますが、今ではアートが投機商品になってしまっているそうですね。

杉本 利回りから考えるとアートが相対的に一番いい商品なんです。アートの証券化はここ四〇五

やってくれるような人でないと。彼らの技で、古代からそこに存在していたような神社が完成しました。日本の職人の技術や勤勉さは今も大したものですよ。

年ぐらいで進みましたし、アートファンでもたくさん生まれました。彼らはアートに興味があるわけではなく、価格が上昇すると思われるアートの作品を狙い撃ちにして買う。普通だったらほかのファンでいろいろな投資をするのだけれど、そのお金がアートに流れてきた。それが健全な状況かどうかはまた別の話です。かつてアートは美しくて素晴らしいものだったけれど、今ではもうかる商品になってしまったのです。

僕の場合も一〇年前は三〇万円だったものが一千万円になっているのだから、投資しておけば非常に利回りは高いわけです。そういう作家は現代美術の中で、恐らく五〇〇六〇人はいらっしゃるね。日本では村上隆、草間彌生、河原温、僕なんかも入っていて、そ

という作家に関するデータが指標として、ネットで調べればすぐにグラフ化して出てくる。業界の中では利回りの高い作家からランク付けされています。日本でも最近ではアートファンドができています。そうですね。ただアートには見て楽しむという要素はありますが、一般的な使用価値はない。その価値は非常に心理的なものです。

——そうかもしれません。

杉本 しかし、根本的に考えてみると、金本位制だった時代の金^{きん}だつて、なんで価値があったのか(笑)。古代から権力の象徴になっていて、美しいし、変質しない。でも食べられるものではなく、非常に心理的な価値があったんだと思います。証券市場だってそうです。資本主義は、年間最低でも二、三%とか、五%経済成長が続くということが前提にないと成り立たない。それはファンタジーの世界ですね。想像力の中の「絵に描いた餅」なんです。

——それだと、どこかに行き詰まりが出る可能性もあります。環境問題はまさにそうです。

杉本 ですから、マルクスやケイ

ンズの経済学も、管理できる経済システムが果たしてあり得るのか、ということが原点ですね。資本主義である限りは経済成長が前提ですから、地球をどんどん壊していかなければいけない。一八世紀は啓蒙主義の時代でフランス革命の「自由、平等、博愛」という美しいコンセプトがあり、それが民主主義の基礎となりました。しかし一九世紀の産業革命を経て、マルクスが新しい経済システムのモデルを考えたものの、失敗に終わっています。その後ケインズとかガールブレイスなどが出てきたけれども、それは微調整に過ぎず、社会全体のシステムをどうするかという問題について、この一〇〇年間は新しいモデルが提示されていない。

——資本主義の限界が環境問題に表れていても、それに代わるものを見つけれずにいます。

杉本 アートが資本主義化されていくのは、問題もあるけれどもそれほど地球環境を壊すものではないから悪いことではないのかもしれない、という気はしますが。企業がアートのスポンサーになった

りするのは、ある種の免罪符かもしれないですね。

——日本企業もバブル時代には相当美術品を買いました。

杉本 そうでしたね。今銀行などには相当抵当流れの美術品が眠っているのではないですか。欧米企業の場合は、有名な作品を買うだけではないんです。もともと欧米では、ロスチャイルドにしてもロツクフェラーにしても大金持ちは教会に大金を寄付して、利益を社会に還元してきました。ところが二〇世紀中盤以降、教会の権威はすっかり失墜してしまったので、その代替行為のように美術館に寄付する。あるいは美術館を作っ

しまう。それによって社会に還元することになったわけです。日本ではそれが税制上認められていないので、貧しい形になってしましますが。

——税制の問題もありますが、日本人は何かいいことをして天国に行こうという宗教観が希薄ですね。自分が好きで集める。安宅コレクションの安宅英一さんなどがそうです。彼のコレクションがもとになって、大阪市立東洋陶磁美術館ができました。

杉本 また欧米企業はアート支援の手法も多彩です。例えばドイツ銀行は各国の支店に一人ずつアートディレクターを入れて、その国





すぎもと・ひろし●1948年東京生まれ。立教大学経済学部卒業後、ロサンゼルスのアートセンター・カレッジ・オブ・デザインで写真を学び、74年よりニューヨークに在住し制作活動が続けてきた。現代美術家として活動するかたわら、古美術商を営んでいた時期もあり、その経験が日本の美意識への理解を深めた。代表作に自然史博物館のジオラマを撮影した「ジオラマ」シリーズ、世界各地の海を同じ手法で撮影した「海景」シリーズなどがある。2001年、先駆的な仕事をした写真家に贈られるハッセルブラッド国際写真受賞。著書に『歴史の歴史』（六耀社）、『苔のむすまで』（新潮社）など。世界を巡回してきた展覧会「歴史の歴史」は、金沢21世紀美術館（11月22日～2009年3月22日）、大阪の国立国際美術館（2009年4月14日～6月7日）で開催。

日本文化の影響力は今でも大きい

の作家だけを集めさせるんです。僕もそうやって選ばれて、「ニューヨークのグッゲンハイム美術館で展覧会をやるので作品を作ってくれ。三千万円出す」と言われました。そのお金でスタジオに大きな現像装置を入れたので、大判の作品を作り始めることができたんです。僕の作品の価値が上がったから、結局ドイツ銀行としては得

をした（笑）。企画は美術館、お金はドイツ銀行という賢いやり方です。しかもお金は出すけれど口は出さない。

——それは素晴らしい（笑）。高価な名作を何億円もかけて買うのいいとは限りませんね。

杉本 そう。結局値が下がって、買ったときより安く売ったりしているんですから。

——今中国でもアートブームだそうですね。相対的に日本の価値が下がるということ。

杉本 アメリカに住んでいると、「外から見た日本」がよく見えます。

す。経済的な存在感が薄れていることは確かですね。しかしアートの世界で薄れているわけではありません。印象派などは浮世絵の影響が強いですし、ジャポニズムが

一九世紀にありましたから、明治の文明開化以降西洋美術に与えた影響も非常に強い。六〇〇七〇年代以降のコンセプチュアルアートも禅の影響を圧倒的に受けています。ですから世界文明史的に言えば、日本文化はヨーロッパに浸透しているんです。一二世紀に既に「源氏物語」が書かれたというのはすごいこと。そういう意味での価値がなくなることはないと思います。日本を高く評価している人はたくさんいて、経済学者のピーター・ドラッカーなども日本美術の大コレクターです。

——少し安心しました。

杉本 ただ日本では戦後大金持ちがいなくなったのが痛い。階級がなくなつた代わりに、個人ではなかなか高価な美術品は買えなくなりました。今中国の金持ちは自国の作品を買い集めています。以前の日本の金持ちのようにね。自国の文化を高く評価して高く買う。それは自分たちの国の価値そのものでもあるわけです。

——一般の日本人は杉本さんの作品やコレクションを美術館で拝見するしかないですね。十一月から

開催されている「歴史の歴史」展に行っていたきたいものです。それから、小田原にご自分の財団をつくられるそうですね。

杉本 市の認可が下り次第、今僕が設計している建物の建設に取り掛かる予定です。自分のコレクションを集めるほか、能舞台なども作る計画です。これまで得てきた建築とアートの知識をすべて融合させた構築物にしたいですね。

「歴史の歴史」展には、日本の近現代史に関わるコレクションも展示する予定です。例えば雑誌「タイム」。表紙を見ているだけで、アメリカの対日観の変遷がよくわかります。戦前から戦後にかけてどのように彼らが日本を見ていたか。縄文時代の石器や化石もあれば、「タイム」もある。もちろん僕の写真もあります。

——写真だけでなく杉本さんの美意識や歴史観、宗教観、経済を見る目など、すべてが注ぎ込まれた展覧会ですね。楽しみです。本日はどうもありがとうございました。